

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870533

研究課題名(和文) 地方都市における乳幼児期の貧困の構造

研究課題名(英文) The Structure of Early Childhood Poverty in Regional Cities

研究代表者

小西 祐馬 (KONISHI, Yuma)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：90433458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、個人のライフチャンスに深刻な影響を与える「乳幼児期の貧困」の構造を明らかにし、社会的支援のあり方について検討することを目指した。保育所を利用する保護者を対象とした統計的調査とインタビュー調査から、「乳幼児の養育環境の不平等」の一端を明らかにした。親の所得に応じて、子どもの衣食住、医療、レジャー、親子関係などに差が見られた。貧困にある家庭の親は、経済的・時間的・精神的余裕が失われていると感じ、子どもにいていねいに関わることが困難であることがわかった。また、現在の日々の生活に大きな支障はなくとも、低所得によって貯蓄ができず、学資保険もかけられないことが多く、将来への不安をもたらしていた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study are to reveal the structure of “early childhood poverty,” which severely affects opportunities in individuals’ life, and to consider forms of social aids to resolve the issue. From a statistical investigation and interviews with parents of children in child-care centers, several factors of “inequality in rearing environment of infants” were revealed. Differences were found in clothing, food, housing, healthcare, leisure and parent-child relationship based on parents’ income levels. Also, parents in poor families seemed to lack financial capabilities, time and emotional stability enough to care their children faithfully. Even those parents who have currently no significant challenge in making a life are anxious about the future due to inability to save up money or take up educational endowment insurance due to low income.

研究分野：社会福祉学

キーワード：子どもの貧困 保育 養育環境の不平等 乳幼児期の貧困

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、社会問題化している「子どもの貧困」の解決の糸口を提供するために、子どもの貧困問題の中でも特に早急な対応が求められている「乳幼児期の貧困」の構造について明らかにするものであった。

「乳幼児期の貧困」が重要である理由は、第一に、個人のライフチャンスに最も深刻な影響を与えるのが「乳幼児期の貧困」だからである。第二に、日本においては、乳幼児への公的支出が他の先進諸国と比べて著しく低く、貧困にある子育て家族の不利が解消されていないおそれがあるからである。

「子どもの貧困」への社会的関心は高まったものの、乳幼児期の貧困に関して特筆すべき研究は行われていなかった。発達心理学分野において就学前の「子育て格差」に関する調査研究が行われたものの、貧困にある親子が捉えられてはいなかった。こうした背景のもと、個人の人生に深刻な影響を与える乳幼児期の貧困の解決のための研究を進めるべきだと考えたことが本研究の背景であった。

## 2. 研究の目的

(1)「養育環境の不平等」という視点から乳幼児を育てる家族の生活実態の分析を行い、現代日本における乳幼児期の貧困の構造を明らかにすることを目的とした。

(2)乳幼児期の貧困の解決・緩和のため必要な支援について明らかにする。貧困家族に何が不足しているのかを明らかにしたうえで、貧困にある子育て家族の不利の解消と子どもの平等な生活環境の保障を目指すための、総合的な社会的支援のあり方を検討した。

## 3. 研究の方法

(1)乳幼児の養育環境調査(アンケート調査)

乳幼児の養育環境(何を所持し、どのような住居で、どのような生活を送っているのか)の不平等を把握するために、保育所を利用している保護者を対象にアンケート(統計的)調査を行った。11の保育所の保護者、約450名から回答を得た。

調査内容は、主に、家庭における経済的・物的・文化的資源の把握、日常生活スタイルの把握、保護者の子育て方法・子育て意識の把握であった。

(2)乳幼児を育てる保護者へのインタビュー調査

アンケート調査で得られた知見をさらに深めるために、経済的に安定した保護者と低所得の保護者へのインタビュー調査を行った。第一に、貧困にある個々の家族がどのような生活を送っているのか、より具体的に明らかにした。第二に、家族が現在の状況に至った経緯について、主に保護者の生活史を聞き取り、何が現在の状況をもたらしたのか、について検討した。

## 4. 研究成果

## 2. 「養育環境の不平等」調査より

(1)乳幼児の養育環境調査(アンケート調査)

長崎市内の保育所を利用する保護者にアンケート調査に協力してもらった。10ヶ所の保育所(私立2、公立8)に依頼し、回収数は420、回収率は57.5%だった。調査時期は2014年12月~3月。以下の分析は、所得階層を、低所得層(300万円未満、全体の27.1%)、中所得層(300万円以上500万円未満、全体の41.0%)、高所得層(500万円以上、全体の31.9%)の3区分に分けて行った。

### 生活・経験の不平等

食生活について、朝食・夕食の頻度や内容(肉、魚、野菜、果物、カップめん、ファストフード、コンビニ弁当など)を尋ねたところ、「果物を食べる」「スナック菓子を食べる」は所得と関連していたが、食事の頻度やその他の食材を食べる回数などではあまり大きな違いはみられなかった。

家庭における所持品(絵本、おもちゃ、洋服など)について、ひな人形、パソコンなどいくつかについては高所得層ほど保有している割合が高くなるという結果となった。スマートフォンの所持率については低所得層が93.3%、高所得層が90.2%と、低所得層のほうが高くなった。

「衣食住」のうちの「衣」(洋服は十分か)については所得による差はほとんどなかったが、住居面では「とても狭く感じる」と回答する低所得層が16%にのぼり、所得の影響がみられる結果となった。

「この1年で泊りがけの旅行に行ったことがある」は、「行っていない」という回答が300万円未満層では6割であるのに対し、500万円以上では3割にとどまった。「旅行・レジャー資金が不足しているか」という質問についても所得による違いがみられた。「習い事」についても所得が低くなるほど習い事をする割合も低くなっている。

### 医療の不平等

親・子ともに、現在の健康状態については所得階層との関連はみられなかった。しかし、予防接種(インフルエンザ、おたふくかぜ)の実施率と所得とに関連があり、おたふくかぜでは低所得・中所得層が予防接種率20%台なのに対し、高所得層では45%となった。

長崎市では就学前の子どもへの医療費補助があるため、通院を控えるということはありませんでしたが、「経済的に厳しくて病院に行けない」という項目について、低所得層のみ約8%が該当した。医療費については、就学前の今は良いが小学生になってから心配だという声が以下のように寄せられた(自由記述欄)。

医療費の負担を減らしてほしい。他県では無料なのに長崎に引っ越してきてから負担があることを知りびっくりした。小学校入学と同時に大人と同料金になり、上の子どもたち(小学生)はよっぽどでないといけないうけられない。インフルエンザの予防接種も高すぎてうけられない。保育園は家から徒歩でいける所にあるのに、いっぱい入れず、わざわざ車で送迎しないといけないところへ行かないといけないうけられない。

(父母・子ども3人、年収300~500万円)

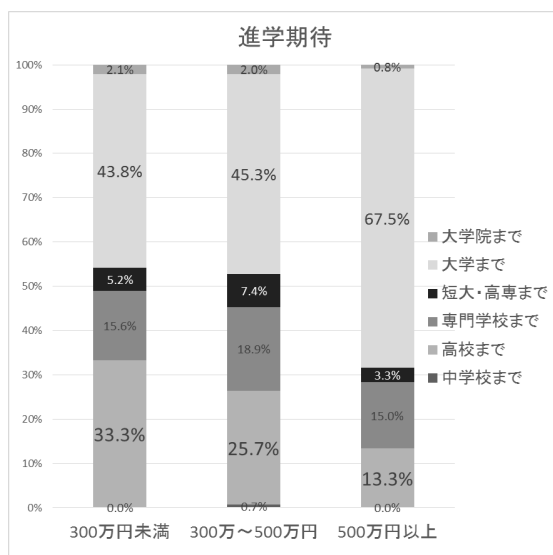
小学生になると医療費が3割負担になることに不安を感じています。薬代だけでも現状のように無料にしたいです。

(父母・子ども2人、年収700~900万円)

### 所得階層と子どもへの関わり

子どもとの関わり方(養育スタイル)を所得との関連で分析した。「怒って、手がでてしまう」「いらいらしてどなってしまう」「どのように接したらいいかわからなくなる」「子どもの話を週5回以上聞いてあげる」などにおいて、わずかながら所得による違いがみられた。

「お子さんに、どの段階の学校まで進んでほしいと思いますか」という、いわゆる「進学期待」は所得との関連がみられた。大学まで進学してほしいという回答は、500万円以上の層では7割近くに上ったが、300万円未満の層では4割ほどだった。300万円未満の層では「高校まで」が3割を超えている。



### 経済的困難

経済的困難の状況について検討したところ、現在の暮らし向き(生活状況)を尋ねたところ、「大変苦しい」「やや苦しい」において、低所得層が際立っている。「負担が大きいと感じているもの」では「食費」「洋服代」「おもちゃ代」などで所得階層との関連がみられた。おもちゃ、絵本、洋服などは量

としては所得にかかわらず保有している状況があったが、それを揃えるための負担は同等ではないということである。一方で「保育料の負担が重い」という項目では所得が高い層ほど高くなっている。応能負担の保育料は、無料の世帯もあれば月額5万円以上という大きな負担が課せられる世帯もあり、不公平感をもたらしているようだ。

アンケートの自由記述欄には、以下のような意見が寄せられた。

パートで仕事をしているときに離婚し、その後、子供に障害があることがわかりました。毎週1回、通園施設へ行き、月1回療育機関を受診し、とてもじゃないけど正社員で働くことも出来ません。Wワークで働いています。同居の親戚も大病を患い、身体障害者です。高齢で少しボケはじめ、たよれる人もいません。生活保護を受けると生命保険も車もダメだし。私1人の稼ぎで毎日ギリギリで生活しています。もっと親身に話を聞いてくれるところもほしいし、支援も考えてほしいと本当に思います。

(母・子ども1人・親戚、年収100万~200万円)

(子どもは)自分には「パパ」が居ないということを感じており、たまに顔がムツとなります。やはり父親は必要なのでしょうか。

子育てについてですが、毎日楽しく過ごし、成長する姿がステキだなと思います。しかし、自分(私)に時間と心の余裕がないときにイライラしながら八つ当たりしてしまっています。どうすれば、いつも笑って、おだやかでいられますか。

(母・子ども1人・祖父母、年収100~200万円)

### (2) 乳幼児を育てる保護者へのインタビュー調査

「養育環境の不平等」と「乳幼児期の貧困」をより深く理解するためにインタビュー調査を行った。

Aさん(35歳、短大卒)

2人の子ども(小学生と保育園児)と暮らす母子世帯のAさん。離婚後、職業訓練に通って資格を取るなどして仕事を探し、現在は事務系の仕事を契約社員として行っている。フルタイムで働いて、月収14~15万円、ボーナスはない。

「時間的制約」について尋ねたところ、一日の中でAさんが一人で自由にできる時間はほとんどないと答えた。

「ほとんどないですね。10分20分くらいあればいいのかなって。だから、(自分の時間は)22時から23時までの間をこの子の宿題見ながらテレビ見るっていう感じ

ですかね。」

自分の時間がなく、ストレスを感じる余裕もないほどで、忙しい中、子どもの話をていねいに聞く時間がないほどとのことであった。経済的な困難として、以下の通りであった。

「金銭的な面ではですね。今は何とか大丈夫なんですけどだんだん大きくなってきた時に、高校までしか行かせられないとかになってくるかもしれないです。」

「学資保険もかけようとしてはいるが、なかなか難しい」とも答えている。将来の心配が大きいとのことであった。また、住居についても、現在の賃貸アパートでは家賃も高く、狭いため、公営住宅に一刻も早く入りたいとのことであった。

Bさん(32歳、高校卒)

夫と子ども2人(小学生と保育園児)と暮らしている。収入は2人あわせて約300万円ほど。夫の趣味はパチンコ、スロットで、夫婦共通の趣味としては競艇やバイキング(食べ放題)をはしごすること。仕事は二人とも安定してできているわけではなく、最近思うように稼げていないとのことだった。

Bさんは家庭内において頻繁に「夫婦喧嘩」をすることとのことであった。

「(夫婦喧嘩は)しょっちゅうですね。子どもの前でしますねうちは、誰に聞いてもダメって言われるんですけど。うちは、手がでる、取っ組み合いするんですけど、その分仲良いんですよ普段が。年に2、3回。多くて2回。基本会話がケンカっぽく聞こえるみたいで。」

「取っ組み合いのケンカ」の際、子どもは「ぼかーんと口開けて見てる」とのことであった。

Cさん(35歳、高校卒)

夫、子ども3人(小学生と保育園児)と持ち家で生活している。夫は大卒で、安定した高収入の職業についている。母はサービス業(インタビュー時育休中)父大卒、母高卒。年間所得は800万円ほど。一戸建ての家を購入している。

高所得世帯ではあるが、かつてCさんは育児不安や子どもへの不適切な対応(体罰)など、さまざまな困難を抱えていた。その背景には、Cさんが貧困世帯で育ったことがあることが推測された。

「なんだろう・・・虐待とかあるじゃないですか。ああいうのって・・・ね、回る(連鎖する)って言うじゃないですか。だから、自分の生活が子どもの頃苦しかったのを、自分の子どもに当たっちゃうのがどうしたらいいのかかわからないですね。なんかそ

ういうのってどう・・・なんかこう、あんた満たされてるでしょみたいなことを、ついつい・・・男の子にはあんま言わないんだけど、娘に言ってしまうというか。」

Cさんのサポートは夫によってなされていた。「夫との関係がうまくいっているから、何とかなっている」とのことであった。

(3)まとめ

一地域におけるごく小規模の調査であるが、生活の諸側面における格差・不平等が乳幼児期から存在していることが明らかになった。それがその後の人生にさらなる格差・不平等をもたらすことが危惧された。

貧困にある子育て家族に対して、どのような支援が必要なのか。調査からは、厳しい現状を訴え、多様で手厚い支援が必要であることが示唆された。以下はアンケート調査の自由記述欄における意見である。

核家族化が進む中、産後ケア施設、育児サポート施設(公的なものや低料金で利用できるもの)が必要だと思う。(私自身、親がいないので産後はとても苦労したので・・・)

小学校6年生までは医療費を無料にしてほしい!! 予防接種も無料にしてほしい! (給食費などを無料にするなど)

税金・年金等は多く支払っているのに、まだ安月給の若い子育て世代は生活が苦しい環境がそろっています。医療費の見直し、子育て支援など、今から将来のある子供たちへの住みやすい環境づくりが大切だと考えます。もっと長崎で子育てをしやすい環境を整えていかないと少子化、長崎の若い世代の人口は減るばかりです。

労働環境が整っていない職場では母親は本当に働きづらい。以前いた職場が人数にゆとりがなくパートでもとてもアテにされるので子供の病気で休む度に「くびだ」といちいち電話がかかってきていた。保育園からは何度も電話がかかってくるし、職場と保育園に挟まれづらい。途中から病児保育に預けるのも料金が高く、パート代ではとても払えない。

特に多く寄せられたのが、経済的な支援に関する意見であった。続いて、職場の理解、その他子育て支援策の充実への要望があった。

今回は、保育所を利用している層への調査であり、セーフティネットに包摂された人々であったと言える。保育所等の社会資源とながっていない、より困難な境遇にある人々・子どもがどういった状況にあるのか、今後明らかにしていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

小西祐馬、「貧困と保育(3) 養育環境の不平等」、『現代と保育』、査読なし、92号、2015年、pp.143-151

小西祐馬、「貧困と保育(2) 貧困の世代間連鎖を考える」、『現代と保育』、査読なし、91号、2015年、pp.146-153

小西祐馬、「貧困と保育(1) 乳幼児期の貧困問題とは」、『現代と保育』、査読なし、90号、2014年、pp.142-153

[学会発表](計1件)

小西祐馬、「子どもの貧困と家族 乳幼児期の貧困を中心に」、『第23回日本外来小児科学会年次集会(招待講演)』、2013年9月1日、福岡国際会議場(福岡市)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小西 祐馬 (KONISHI, Yuma)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：90433458